# 生かされて生きる

松本瑞江

患難をも喜ぶ
そは患難は忍耐を生じ
忍耐は練達を生じ
練達は希望を生ず

一九七五・十二・二一　　渡辺泰造

皮表紙がボロボロになった聖書の扉に渡辺泰造牧師が毛筆で書き残してくださったものである。先生は一九七一年九月に、二十五年間牧会した膳所教会を辞任されたその後、兼牧の瀬田伝道所で礼拝を継続される。自宅を伝道所として開放していたのは高野祐治・スエノ夫妻であったが、祐治兄が高齢になられて召天されたあと、渡辺牧師は伝道所の住所変更と、名称変更をされた。それが現在の富士見台伝道所である。

渡辺牧師は、このローマ人への手紙第五章三〜四節のみ言葉を、説教に好んで用いられた。先生は持ち前のユーモアを交えて、戦前からの長い信仰の生活を証しされた。先生のユーモアは「患難」が患難ではなくなって、私をクスクスと笑わせた。しかし、最後には必ずこう結んだ。「『忍耐』は、ただじっとがまんしているのではなく、祈りだよ。祈ることが大切なのだ。『練達』は、宮本武蔵流の剣を振り回すような練達ではない。祈りから生じてくる証明なのだ。それは獲得するものではなくて、与えられるものなのだよ。だから喜びなんだ。キリストにあって示される証明は、ほんとうに希望だね――」

この言葉は今も私の内に生きている。のちに私はアシュラムに導かれて祈りの実践を教えられ、また基礎的な学びの必要に迫られて社会人の生涯教育として神学校で学んだ。そして教団の補教師の資格をいただいた。

渡辺泰造牧師は二〇〇〇年四月十五日に召天された。私は先生が残された伝道所で、それは家の教会であるが、恵みによって夫と祈りを共にしている。